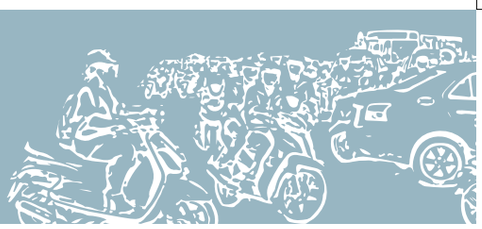
砂名の ベトナムに乾杯



第２回　行き先はダーツで決めるのか？

海外で展開する事業を「日本酒の普及だ！」と一人合点したところで、いったいどこで展開するのだ？「世界」と一口に言っても200か国近くもある。手当たり次第リサーチしていたら、すぐに資金が底をつくことぐらい、無鉄砲な私にも容易に想像はつく。

世界地図を広げてダーツか？

いやいや、ちょっと待て。まずは日本酒の輸出量が10位以内で、私自身が行ったことのある国をピックアップすることにした。

日本酒の輸出世界第一位はアメリカ合衆国。過去にダラスやサン・アントニオで行われた金春流の能楽公演に、スチールとムービー撮影のお手伝い兼、当時能楽を習っていた母の荷物持ちとして、連れていってもらったことがある。しかし四半世紀も前の話だ。

2013年にルイジアナ大学の日本フェアイベントに「奈良の茶道」で出展の話があったが、あまりに急過ぎたこともあり、申請書を書く段階で降りた。実現していれば日米両方ともに収穫があっただろう。NPOでの初の海外での文化活動としてはそれで良かったかも知れない。しかし、その先への繋がりや発展が感じられなかった。

プライベートで旅行したニューヨークは、今やアメリカ人による酒屋や蔵元までできている。良いかも知れない。

姉と旅行し、後に金春流能楽公演のスタッフの一員としても訪れたことのあるパリ。家族と旅行した香港、駐在日本人の友人を訪ねて旅したシンガポールなど、いくつか候補は上がった。

今、香港が熱い。香港人、欧米人、日本人の酒サムライがいて、日本酒店や酒屋が相次いでオープンしている。酒税が無税なのと、香港人の日本酒愛のおかげだ。Queenswayの「Sake Beya Masu 酒部屋斗」。日本びいきのオーナーLouis Hoさんと、香港人のお客様たちと。

ランキングには入っていないが、「ドバイ」も浮かんだ。当時、奈良の「梅乃宿」さんの純米大吟醸の720mlボトルが、35万円で落札された。元は3,000円いくらかぐらいの大吟醸だったと思う。後に梅乃宿の社長、吉田佳代さんにそのことについてお聞きしたら、「それ、1銘柄だけなのよ」。それが業界内で駆け巡っていただけで、決してドバイで日本酒が売れているのではなく、梅乃宿さんでの輸出額全体の1%にも満たないらしい。

新しい海外文化で高価のものは、まずは「富裕層」から入り、中間層に広まり、庶民までゆき届いたら普及したと言えるだろう。

日本でのワインがそうだった。輸入されて来ても、一般の人は手を出さなかった。どんな風味かも分からず、関税を掛けられ、やたら高額に跳ね上がった飲料に、金を出そうとは誰も思わない。それが今や、近所のコープで、チリ産やオーストラリア産のワインが、350円ぐらいで売っている。

そんな日本酒市場の過渡期にあるドバイを選ぶのはいかがなものか。「豊かな国」といっても、外国の文化を受け入れ、成熟する土壌があるかどうかは別問題だ。目先のお金に惑わされてはいけない。

さて、NY、パリ、香港、シンガポール。

だいたい妥当なところで落ち着いた感があったが、リサーチに行くなら、さらに一か国に絞りたかった。4か所をまんべんなく回ったところで、たいした調査はできないと思ったからだ。

それぞれ4枚の紙に国名を書いて壁に貼り、ここでダーツか？

取りあえず、その頃、貴重なご縁を頂戴した方に、私は相談することにした。

そのことが、事態を意外な方向へと向かわせることになるのである。

月森砂名（つきもりさな）

奈良県出身。同志社大学文学部卒業。2015年よりホーチミン市にて、日本酒の普及を目的に、ベトナムで初の日本酒専門店、Standing BAR【日本酒で乾杯！】を立ち上げる。東京で舞台写真の撮影や舞台制作に従事する一方で、2001年より「月森砂名」名で、小説やフォトアートの作家活動を行う。2009年設立のNPO法人 Layer Boxにて、日本の伝統文化・伝統産業について、大学、高校、専門学校などと、プロモーションビデオ、3D、CGなどでコンテンツ制作を行い、世界に発信する事業に取り組む。

p34_砂名の□ トナムに乾杯_02.indd 34　2019/12/22 16:48